

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

特別寄稿 サンパウロから帰国して ——石川達三『蒼氓』雜感

尾西康充

二〇一三年九月一五日から三ヶ月間、ブラジルのサンパウロ大学日本文化研究所の客員教授として、同大学の大学院生に日本近代文学を講義した。渡航費や滞在費、教材費などのすべての経費は、国際交流基金の負担であった。滞伯中、リオデジャネイロやブラジリアの連邦大学でも日本近代文学をテーマとするセミナーを担当した。

日本近代文学といつても、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫など、芸術的な志向の強い作品の系統は、ブラジルではすでに紹介されているので、それとは異なる社会的なテーマを扱った作品を講義することにした。短い期間ではあつたが、①日系移民の悲劇を描いた山崎豊子「二つの祖国」、②原爆の被害を描いた原民喜「夏の花」と大田洋子「屍の街」、③貧困と格差の現実を描いた小林多喜二「蟹工船」を講読することにした。

「二つの祖国」は、第二次世界大戦中にアメリカ西海岸に住む日系人約一三万人が強制収容所に移送された歴史を描き出した。ほとんどのブラジル人は知らないのだが、ブラジルでも大戦中に、日系人が連行され、財産の没収や肉体的な虐待がおこなわれた。つぎに邦字紙「サンパウロ新聞」の「真相究明委員会で初めて議題に」(二〇一三年一〇月一五日)という記事を紹介してみよう。

サンパウロ市議会で一〇日に開かれたサンパウロ真相究明委員会の公聴会の中で、一九四二～四七年のジェツリオ・バルガス政権下で日本移民に対して行われた迫害についての討議が行われた。六四～八五年の軍事



サンパウロでの授業

政権時代以外に行われた圧政が議題となつたのは、同委員会の設立以降で今回が初めて。ブラジル真相究明委員会のロザ・カルドーボ弁護士は「ブラジル人を代表して謝罪をし、被害者に許しを請いたい。ブラジルのエリートたちは常に人種差別主義者だった」と述べた。

戦終結後も、『勝ち組負け組抗争』という日系人社会の混乱に乗じて日系人の強制収容がおこなわれた。右の記事によれば、この公聴会では、「四六～四七年にサンパウロ州北部海岸地域のアンシエッタ島に強制連行され、島内の収容所で収監された一七一人の日本移民について触れた謝罪文が読み上げられた」。「負け組」の脇山甚作退役陸軍大佐を殺害した容疑で、アンシエッタ島に一五年間収容されていた「勝ち組」の日高徳一氏（八七〇人）は、「一七〇人の日

本人収容者のうち約一四〇人は無美だった」と証言したという。

他方、原子爆弾の被害もまた、ほとんどのブラジル人が知らない。原爆文学を読むことを通じて、非人道的な核兵器の問題を共有することができた。サンパウロには、日本食材店を営む森田隆氏（八九歳）が住んでいる。広島市で被爆した森田氏は、在ブラジル被爆者協会の会長である。森田氏を店舗に訪ねると、店先で三脚椅子に腰を掛け、日本から約一ヶ月遅れて販売される岩波の雑誌「世界」を読んでいた。森田氏によれば、被爆当時、陸軍憲兵中国憲兵隊司令部において憲兵隊兵長を務め、国民を取り締まる側の人間であった。しかし被爆の惨状を目撃した瞬間、それまでの世界観が一変したという。今では大勢の家族に囲まれる幸せな生活を送っているものの、ブラジルの日系人社会でも被爆者に対する差別があつたと語った。

ブラジル社会における最も深刻な問題は、貧困をめぐる社会問題である。「蟹工船」は院生たちに大きな刺激を与えた。日本で出版されたばかりの拙書『小林多喜二の思想と文学』（大月書店）を、出版社から直接現地に郵送してもらつて、補助教材として院生たちに配布した。

サンパウロ市内には、いくつものファベーラ（貧民窟）がある。福祉施設の市職員に案内してもらつて、私は、麻薬と暴力がはびこっていたモンテアズールという町名の貧民窟にでかけた。市政府は補助金を出したり、授産所を設けたりと、様々な施策をおこなつている。ブラジルの連邦政府も、連邦大学の学生定員および連邦下院の議席の二〇パーセントから五〇パーセントを、黒人貧困層に割り当てるなど、相当強引な方法で格差を是正しようとしている。しかし、これには保守・中道層からの反発も強い。

貧民窟の隣には、高級マンション街が聳えていた。彼らは交通渋滞を避けるため、自宅からヘリコプターで通勤する。他方、ファベーラのなかは環境整備が不十分で、狭い路地には救急車などの緊急車両も入ることができない。明治の文学者北村透谷が「知らずや、人は魚の如し、暗きに棲み、暗きに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり」（時勢に感あり）と記した通りの光景が、サンパウロには今も実在するのであつた。



銀行のストライキ

* * *

神戸北野の山本通にある国立海外移民収容所は、南米ブラジルを中心とする海外移民を送り出すための施設であった。移民たちは出航前にこの施設に入所して、現地での生活の基本情報に関する講話を聴き、健康診断や予防接種を受けた。一九三〇年三月八日、春雨に煙る神戸港の情景から小説を起筆したのは、石川達三であった。達三本人が大阪商船の移民船らぶらた丸に乗って渡伯した体験は、小説「蒼氓」（星座』創刊号、一九三五年四月）として発表された。排水量七二六七トン、船客数九〇〇名のらぶらた丸は、喜望峰を経由する西回り南米東岸航路に就いていた。一九二六年から三九年まで合計三二回日伯間を往復し、移民輸送総数は一万八四〇四名にのぼった。達三は移民たちの姿をみて衝撃を覚える。達三によれば、「私は雨の中にひとり出て行き、赤土の崖のふちにうずくまり、だれにも顔を見られないようにして、しばらく泣いていた。私はこれまでに、こんなに巨大な日本の現実を目にしたことはなかったかもしれない」と告白するのであった。⁽¹⁾

「蒼氓」は第一回芥川賞（一九三五年上半期）を受賞したことで知られている。「蒼氓」を第一部とし、第二部「南

「航海路」と第三部「声無き民」を合わせて単行本『蒼氓』(三五年一〇月、改造社)が出版された。しかしブラジル移民の間では、ほとんど読まれていない。私自身も日系文学の関係者に尋ねてみたところ、本のタイトルしか知らないし、別に読む気にもならないという人ばかりであった。「移民の悲惨イメージを広めた張本人とされる作品」として、⁽²⁾きわめて評価が低いのである。たとえどれほど自分の生活がみじめで悲しいものであっても、それを他者によつて語られる」とは、恥辱を与えられるのに等しい。ちなみに同書のポルトガル語訳は、ブラジル移民一〇〇周年に当たる一〇〇八年にサンパウロのアテリエ・エディシヨナル社から刊行された。マリア・フサコ・トミーマツ、モニカ・セツヨ・オカモト、タカオ・ナメカタが翻訳し、マルシア・ヒトミ・タカハシが校閲した。Sobr. Uma Saga da Imigração Japonesaである。しかし、版元が学術書を専門に扱う出版社であったこともあって、日系コロニアの社会——大戦後、ブラジル永住を決意した人たちの間から“日系コロニア”という言葉が使われるようになつたとされる——では、ほとんど普及されなかつたといふ。

その一方、細川周平氏によれば、『蒼氓』の「第三部のブラジル編ではあつけらかんとするほど気楽な暮らしが描かれて」おり、「この描き方には政府の定住政策が関わつていると考えられる」という。⁽³⁾「政府の定住政策」に沿つて書き進められているとされる点は、石川巧氏が「権力の期待する通りに成長する群衆を美しく描く」という手法において権力の機構そのものを温存するような働きさえしている」と指摘した点に重なるだろう。⁽⁴⁾

このように『蒼氓』は、ブラジルの日系コロニアの人たちからは“悲惨すぎる”といわれ、文学研究者からは“樂觀的すぎる”といわれている。移民の場合に限らず、だれかに代わつてその人の生活を描くことの難しさがみられる。とりわけそれが社会正義の視点から表現される場合、そこに一方的な価値判断が下されてしまつていて、いう印象を持たれてしまうと、その作品から説得力が失われてしまう。達三は、当時の日本社会には「生活の絶えざる脅威と圧迫、絶えざる反抗と焦慮、不安と怒りと絶望とが有るばかり」であつたとする。収賄や汚職といった政財界の腐敗、金輸出解禁とともに経済危機、「工場のストライキと共産党事件の裁判」、軍縮会議などの事

件が続き、「母國の終焉を見るように悲しかつた」という。ブラジルには猛獸や毒蛇、鰐、そしてマラリヤなどの「無数の迫害」があるが、それでも「日本の農村の津々浦々までも行き亘つた文明の脅威」に比べれば何でもない。「日本の農村のどこに農村らしい駄蕩としたものがあろう」というのである。

達三はこの作品に「農民出身の移民集団を描くことによって、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格」を持たせようとし、「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢」を示すことを作家人生のモチーフとした。⁽⁵⁾しかし移民船のなかの移民たちは、どれほど不平が高まつても「いつまでも煙を上げているばかりで纏まつた意見は出来あがらず、監督に交渉するという実力手段もなかなか行われるものではなかつた」。彼らは「力を合わせて、塊になつて不平を叩きつけるという方法を知らないようであつた」。E室の黒肥地は「まだ二十五、六歳の血氣あふれるばかりな九州男兒」で、彼らの間で「一番はげしく反抗の口吻を洩らしていた」。しかし彼もまた、直接その不平を監督に向かつて叩きつけるような意識は持たなかつたのである。

彼等は農村に在つていつもこういう不平を抱きながら、しかも誰に叩きつけてよいかもわからないで親子弟々をすごしてきました。不平は不平だけで終り、満足な状態にむかつて積極的に努力するということは常に不逞なことと考えられて來た。それは永いあいだの政治の悪が馴致した憫れむべき習慣であり習性であつたかもしれない。「政道に對して口をさしはさむ」者は刑に処せられる時代が永く彼等を支配していました。船のなかの不平は不平のままで夜のふけるとともに消えて行つた。

この後、黒肥地は酒を買って飲んで寝てしまう。「そうすることによって自分の不平を消すことができる」のを彼は知っていたからだという。調教された奴隸の心性を描いたこれらの表現を読めば、石川巧氏が指摘するように「権力に虐げられた人間の「抵抗」などどこにも存在していない」ように思われる。⁽⁶⁾

主人公の一人、秋田県田沢出身の大泉進之介は、司厨室の手伝いをはじめるとき、自分たちの食膳には決して運ばれることのない贅沢な食材が冷蔵庫に貯蔵されていることを知る。「郷里にいれば何も考へない善良な百姓であつたが、船に入り司厨室の手伝いをしてみて『階級』といふものを見せられたのだ」。「心の底から善良な男」であつた大泉は、「こういう比較をすることによって自分が不幸になるにすぎない事を感じていた」。同じ船には、彼ら移民たち三等船客とは異なる、アメリカ人などの一等船客も乗っていた。「シンガポールから乗りこんだアメリカ人の女」が事務長を呼びつけて、夕食の時間に日本人がデッキで運動するので、寝かしつけていた赤子が目を覚ますと苦情を申し立てた。移民の間から子守を雇うなどの対処がとられたが、それも失敗に終わってしまい、移民の間には「外人という奴はけしからん」という感情が残るだけであつたのである。

*

人種や資本によつて構成される「階級」を目の当たりにしながらも、何ら抵抗できなかつたのは、なぜか――。松本清張は「『蒼氓』（芥川賞受賞作。第一部）を読み返してみて、その描写が小林多喜二に似ているのを知つた。石川のリアリズムは、プロレタリア文学からの影響である」。しかしプロレタリア文学とは対極にあるのは、達三の「傍観者的觀察態度」である⁽⁷⁾。このような松本の発言や、「『蟹工船』における集団描写の技術」が『蒼氓』の表現方法に影響を残しているかもしれないとする久保田正文の指摘を踏まえ⁽⁸⁾、松本和也氏はつぎのように論及した。

「蒼氓」とは、文学シーンにおける“社会性”的欠如が強迫観念的に意識された文芸復興期に、「蟹工船」の社会性を持つ題材や題材を生かす手法を換骨奪胎して、時代性と社会性を持つた題材を常識的＝表層的に小説化したテクストなのだ。しかも「蒼氓」は、「蟹工船」後に小林が提唱した社会的現場における実体験を重視した『報告文学』^{レポート}の実践としても見事にその圈域に収まっている。⁽⁹⁾（傍点およびルビは原文ママ）

「換骨奪胎」や「常識的＝表層的に小説化」という言葉に否定的な意味を込めた松本氏による論及は、さきに引用した「権力の機構そのものを温存するような働きさえ果たしている」という石川氏の指摘とともに、『蒼氓』というテクストが抱えている問題点を剔抉している。「移民とは口実で、本当は「棄民だ」と言っていた」移民の側に立つといいながら、実際の作品は、それを見事に裏切っていたと思われる所以である。「反権力を謳う石川がいかに自分を特権化しているか」という「石川の作家的資質」が問い合わせられる必要があるのはいうまでもない。⁽¹¹⁾また、『蒼氓』が「プロレタリア文学と報告文学を接続」することで、「社会性を持つ題材」を描こうとする「昭和十年前後の言説編成」に一役買つたことや、⁽¹²⁾「ある主体が群衆を間に挟んで国家と対峙し、自分はひとりで立っている」という認識のもと、超越的な位置から群衆を眺め、彼らの成長を見とどけるという展開がいかに心地よく響き、権力の機構そのものを温存してしまう」結果になつたことなど、⁽¹³⁾『蒼氓』に対する批判は尽きないようみえる。

だが、ここでもう一点考慮すべきことがあるように思われる。多喜二は「蟹工船」執筆に際し、労働農民党や労働組合が北洋漁業の労働問題をめぐつて闘争していた経緯を取材した。その一方、達三の前には（読者が期待するような）権力に抵抗する移民などそもそも存在しなかつたのである。海外移民は、外貨および植民地の獲得のために『海外雄飛』するという“名誉”を与えられると同時に、過剩人口を日本社会から放逐するために『口減らし』するという“余計者扱い”を受けていた。プロレタリア文学壊滅の後、文学的抵抗がほとんど不可能になつたとき、このような両義的な意味を担わされていた彼らに、それまでプロレタリア文学によつて社会的関心を高められたいた読者が、『抵抗する群像』というイメージの形を通じて、もはや満たされなくなつた自分たちの願望を投射しようとしたにすぎないのである。

細川周平氏によれば、アメリカやメキシコへの移民のなかには共産党と連帶した人たちもいたが、ブラジル一世が政治運動に加わつたという報告はない。⁽¹⁴⁾また、一九五三年からの戦後移民は、永住を前提とする政府間事業

として取り組まれたので、戦後の移民船の小説にプロレタリア文学の雰囲気がないのは当然であるという。⁽¹⁵⁾サンパウロ在住の文芸評論家安良田済氏（九八歳）に尋ねてみたところ、日系コロニアの作家たちにはプロレタリア文学の影響はなかつたという。高い見識を持ち、日系作家のなかでも尊敬を集めている安良田氏自身は、「父帰る」などの菊池寛の作品が好きで、そこから社会正義のテーマを学んだと話した。生活条件のため低く抑えられた歴しか持たない農民層が主であつた移民たちにとつて、たとえ差別され抑圧された現実を目の当たりにしていても、それが「階級」による社会格差であることに気づかないのであつた。コーヒー農園での作業がいかに過酷なものであったのか、アマゾンでの開拓事業がいかに困難に満ちたものであったのか、各自の実感をもつて個別的な状況を描いた記録類は、数多く残されている。個別的な体験を積み重ねてゆけば移民一般の生活を再現でき、現地を知らない読者でも、それらを読めば彼らの生活を追体験できるだろう。しかしそれだけでは文学作品として真に価値のあるものにはならないのである。

*

*

日米開戦にともなつて米国支持を表明していたヴァルガス政権は、連合国側に加わることを表明し、日本政府に対して経済断交や国交断絶を宣言した。その結果、一九四二年七月、在伯日本公館の職員が外交官交換船で帰国してしまう。笠戸丸に乗つて渡伯した〈第一回移民〉の香山六郎は、そのときの心境をつぎのように語つている。

我々は平素一面には天皇陛下の赤子だと認識を強いられながら、一面はいざとなればサヨナラもつけられずに棄民扱いをされたのだ。私達は駐伯日本外交官の吾々に対してサヨナラも告げずにかくれるように逃げていくような態度に彼等の民族的、否人間的教養の浅はかさをしみじみと感じていた。吾々移植民に永住せよなんておすすめなさる外交官連中が敵性外国人となれば一番に尻に帆かけてにげ出すお偉方なんだ。日本外交官頼むにたらず——と痛感した。⁽¹⁶⁾

香山は、耕地通訳や鉄道工夫、大阪朝日新聞通信員などを務めた後、邦字新聞「聖州新報」を創刊したという経歴を持つ。『錦衣帰國』できる日を夢見て生きていた移民たちは、このとき自分たちが『棄民』であることを否応なく見せつけられた。このとき国家と個人との間の信頼関係が損なわれたのだが、そのことに抗議したのは少數で、むしろ大多数の者は『名譽』回復にむけて国家への忠誠心を昂じさせたのである。サンパウロ人文科学研究所の元所長宮尾進氏は、このときの心情を分析し、「戦時状況下での邦人の唯一の望みは、「神国不敗」の信念のもとに、やがてかなえられる戦勝の曉に、帝国日本の勢威あまねき「大東亜共栄圏」の地に再移住し、安住できる日を待ち望むことであり、その日に備えて皇国民として恥じない耐乏の生活をすることが、正しい生き方であった」とする。⁽¹⁷⁾ここにみられるのは、社会的周縁に生きる人ほど承認の欲求が強く、社会的統合を希望するという論理である。

この逆説的な論理は、日本敗戦後に、日本の勝利を信じて疑わない「勝ち組（信念派）」と、敗戦を認める「負け組（認識派）」抗争となつて噴出する。この抗争に関しては、さきに「サンパウロ新聞」を引用したが、今なお不明などが多い。敵性民族の言葉である日本語を使うことが一切禁止され、情報量が乏しかった当時、正確な情報を入手できにくかったという事情もあつたが、サンパウロ州の奥地を中心に日系移民の人々九割が「勝ち組」に加担していたといわれている。⁽¹⁸⁾「勝ち組」の過激分子は武装組織を結成し、主に都市部にいた日系コロニアの支配層や知識人層の「負け組」を襲撃した。襲撃事件は八六件、暗殺された者は二三名に上つた。「勝ち組」の機関誌「旭号」が休刊宣言をおこなう一九五六年二月まで続いたこの抗争は、現在に至るまで日系人社会に分裂の禍根を残している。これほど深刻な問題に関しては、私などが容喙すべきではない。だが、これは個人が『名譽』と『尊厳』の回復を求める『承認をめぐる闘争（Kampf um Anerkennung）』であつたといえるのではないか。この抗争の背景には、だれもがブラジルに永住する気持ちはなく、いつかは祖国に帰りたいと思つていた日系人の社会が抱え

ていた、『価値共同体としての社会集団』の未成熟という問題があつた。農村部にいた大多数の移民にとって、都市にいた支配層や知識人層への帰属意識は低く、彼らの口から日本敗戦の報を知らされても俄かにはそれを信じられなかつた。農村部では、理想的な社会集団の構成員にみられる個体化や平等化などの意識が発達しておらず、都市と農村との間で日系人社会の連帯感が不十分であつたからである。本来異郷の地にあって連帯すべき同胞であるにもかかわらず、集団的な内部抗争を通じて、祖国への直接的な社会的統合を志向するという手段をとつたのである。

*

*

さきに述べたように、神戸移民収容所のバラックの待合室に充满していた「人いきれとみじめさ」を、達三は「私はこの時ははじめて『作家』になつたかもしだれない」と告白した。この部分、三・一五事件で特高警察によつて激しい拷問を受けている組合同志の代わりに、自分がその惨状を告発しなければならないと思つた多喜二の作家的出発に似ている。多喜二の場合、「私はその時何かの顯示をうけたように、一つの義務を感じた。この事こそ書かなければならぬ。書いて、彼奴等の前にたゝきつけ、あらゆる大衆を憤激にかり立てなければならぬ」と思つた（一九二八年三月十五日）、「若草」第七卷第九号、一九三一年九月）という——達三（一九〇五年八月）と多喜二（一九〇三年三月）は同じ秋田県出身である。「蟹工船」開巻劈頭の「おい、地獄さ行くんだで！」と、『蒼氓』冒頭の移民の最初のセリフ「大泉、進之介でござえまし」、いずれも秋田方言である——しかし社会正義の視点から、だれかに代わつてその人の生活を描くという作家の使命感は、作家の意図通りには機能しないという事態を招くことがある。『声無き民』をめぐる問題群は、つねに『植民地主体』の語りのアポリアと密接に関連している。

一九二一年、日系三世中里オスカルが、日系移民の苦難の歴史を描いた *NHONJIN* という小説で第五四回ジャーナル賞（ブラジル書籍協会主催）を受賞した。ブラジルにおける最高の文学賞の設置から五四年目に、はじめて日系人が受賞できたこととともに、三世にしてようやく日系人みずからが自己の来歴を語る本格的な小説を描くこと

ができたことに注目すべきであろう。三世にもなると生活言語のポルトガル語が第一言語になつており、もはや日本語は失われてしまつてゐることが多い。この小説もポルトガル語で執筆されている。だがそのことによつて歴史と距離をとることができるのかもしれない。決して「一般化される」とのないような特殊なできごとに着目し、そのなかにある人間実存の普遍的な相を見定めて表出すことによつて、ようやく文学本来の使命が達成されるのではないだろうか——。

石川達三の本文は、新潮社版『石川達三作品集』に掲つた。

注

- (1) 石川達三『心に残る人々』(一九六八年一二月、文藝春秋社、一九四〇一九五〇頁)
- (2) 細川周平『日系ブラジル移民文学』II (二〇一三年二月、みすず書房、七頁)
- (3) 同右
- (4) 石川巧「群衆はいかにして国民となるか——石川達三「蒼氓」」(『国文学解釈と鑑賞』第七〇卷第一号、二〇〇五年二月、八〇頁)
- (5) 石川達三『経験的小説論』(一九七〇年五月、文藝春秋社、一一頁)
- (6) 同右、八〇頁。
- (7) 松本清張「石川達三」メモ(『文學界』第三九卷四号、一九八五年四月、一一七頁)
- (8) 久保田正文「もう一つの昭和十年代」(『昭和文学史論』、一九八五年一〇月、九〇頁)
- (9) 松本和也「石川達三「蒼氓」の射程——『題材』の一九三〇年代一面」(『立教大学日本文学』第八九号、二〇〇一年一二月、一五〇頁)。なお松本氏は、杉内昌子氏「石川達三の『蒼氓』に関する研究——構成と成立過程を中心に」(『実践文学』第四一号、一九七〇年一二月)の「この作品が「個人」よりも「集團」を描いている」という指摘を踏まえている。

- (10) 前掲（1）、一九四頁。
- (11) 前掲（4）、七三頁。
- (12) 前掲（9）、一五〇頁。
- (13) 前掲（4）、八〇頁。
- (14) 前掲（2）、九八頁。
- (15) 前掲（2）、三三一頁。
- (16) 香山六郎『香山六郎回想録 ブラジル第一回移民の記録』（一九七六年九月、サンパウロ人文科学研究所、四一八
　　四一九頁）
- (17) 宮尾進『臣道聯盟 移民空白時代と同胞社会の混乱——臣道聯盟事件を中心に』（一〇〇三年一月、サンパウロ人文
　　科学研究所、一八二頁）
- (18) 泉靖一編『移民＝ブラジル移民の実態調査』（一九五七年八月、古今書院）参照